



Cyber-shot DSC-F55K

変えようのない、 変わる必要のない進化の形



F55Kからメモリースティック用スロットが搭載された。このため初期デザインよりボディは大きくなったが、それを感じさせない。



ボタン部分も進化を遂げた。説明書なしでも自然に操作がわかるすぐれたインタフェースだ。

PROFILE ● 酒井俊彦(さかいとしひこ)

サカイデザインアソシエイツ代表。87年東京造形大学卒業。通産省選定グッドデザイン賞、アビターレイテンが展覧(伊)、1995デザインの現在展(加)ほか。

「デザインを継承した理由? 変えようがなかったからです」。Cyber-shotのデザイナー住田薫氏は言う。F55Kはシリーズ4代目。住田氏の言葉通り、基本的には初代から3代目までの形状(写真の上のモデル)を受け継いでいる。

銀塩カメラとは違う これまでにない造形美

Cyber-shotは銀塩カメラの垂流ではない新しいジャンルの製品を作ろう、というソニーらしい考えから生まれた。ファインダーは設けずレンズは回転式に…、自由な発想でイメージを固め、そこにメカをはめ込んでいった。「これとこれが

中に入ります」とメカを渡されてから「ケース」をデザインするのではなく、「こういう商品だからこの形」という、良い意味でのデザイン主導の製品づくり。その姿勢が所有する喜びを感じさせる製品を生み出した。

新しいボディカラーがメカニカルな印象を与える「4代目」はメモリースティックを搭載。内部機構の大幅な変化に伴ってデザインも変更されている。話題の1つであるカールツァイス・レンズはその存在を誇示するかのよう強調され、デザインバランスの関係でレンズとフラッシュの位置は今までと逆になった。細かいところの見直しは

バッテリー収納部の未来的な開閉機構、説明書なしで驚くほど簡単に使うことができる操作性にまで及んだ。よく見ると変わっていないのは回転式のレンズ部の機構のみと言っているかもしれない。

しかし、それでも初代Cyber-shotがそのまま新しい機能をまとめたかのような印象を与えるのは、初代の製品コンセプトとデザインを巧みに継承しているからだ。銀塩カメラと一線を画す当初からの造形美を丁寧に育て、確実な進化を実現させている。「変えようがなかった」という住田氏の言葉は「変える必要がなかった」と捉えるべきなのだろう。